徳島新聞　平成２４年８月２３日〈木〉

徳島市で糖尿病市民フォーラム「あなたの目は大丈夫？」

定期検診の重要性強調

自覚症状出る前に治療を

徳島市医師会の糖尿病市民フォーラム「あなたの目は大丈夫？」が徳島市のアスティとくしまであり、徳島大学大学院眼科学分野の三田村佳典教授が「糖尿病と網膜症」と題して講演した。三田村さんは、糖尿病患者の定期的な眼科検診の重要性を強調。「自覚症状が出る前に治療しないと手遅れになる」と話した。（須見千次郎）

講演「糖尿病と網膜症」

徳島大学大学院眼科学分野
三田村　佳典教授

糖尿病が原因で網膜症になる。単純網膜症という軽症のものから、重症の一歩手前の増殖前網膜症、重症の増殖網膜症まで3段階に分けられる。

注意しなければいけないのは、単純網膜症には自覚症状がなく、増殖前網膜症も自覚症状がない場合があること。知らない間に病気が進み、治療のタイミングが遅れてしまう。糖尿病の人は自覚症状がなくても、定期的に眼科で検査を受ける必要がある。

糖尿病網膜症の全ての原因が分かっているわけではない。まず高血糖によって体内の糖代謝の異常が起き、それに伴う血管障害で網膜の毛細血管に異常を来し、悪玉の血管が生えて網膜の隅々まで酸素が行き渡らなくなる。

最初は痛くないが、少しずつ眼底出血や黄斑浮腫（ふしゅ）が生じて、視力が低下していく。状態が悪くなっても見えるが、最後にドーンと見えなくなる。

適切な時期に治療をすれば経過はいいが、自覚症状が出た段階で治療しても遅い。レーザー治療を施しても、既に悪玉の血管が生えてしまっているので、出血が広がって見えなくなる。レーザー治療が原因で見えなくなったのではなく、治療のタイミングが悪かったということだ。

知らない間に進行するのは一番怖いこと。最初に見えなくなったり目が痛くなったりすれば、患者さんはすぐ病院に行く。ところが最初は痛くなくて見えてもいる。病気が進み「見えなくなった」「どうも見え方が悪い」と思ったころには手遅れになっている病気。適切な時期に治療しなければならない。

治療法としては、網膜症の悪化を防ぐ網膜光凝固術、黄斑浮腫を軽減させるステロイド剤の局所投与、抗ＶＥＧＦ抗体（抗血管新生薬）の眼内注入、レーザー治療で網膜症の進行を予防できなかった場合に行う硝子体手術がある。

硝子体手術には限界がある。手術の前に眼科にかかり、網膜光凝固術による治療を受けていた人は、何もしなかった人に比べて、硝子体手術の後、著しい視力の低下が少ないとの結果が出ている。

手術によって、どんな状態でも視力が回復するわけではないので、手術は最後の手段だ。できれば手術をせずに済むようにしないといけない。

糖尿病患者の定期的な眼科検診の重要性を訴える三田村佳典教授＝徳島市のアスティとくしま